



緑のすみか

滅び方のデザイン

「終活」という言葉を最近耳にする。辞書によれば“人生の終焉をより良く迎えるための活動のこと。” だそうだが、かつて栄えたまちにもそれがあっていいのではないだろうか。

集落や街が人口減少の末に消滅していくのは、人間の営為としてはむしろ自然な現象なのかもしれない。

そう仮定して、無理にその流れを止めずに、優しく看取ってみたい。その際、荒廃して衰退させるのではなく、ひとつずついいねいに、棺桶に花が満たされるように、美しく滅びてほしい。

空き家のリノベーションを通して、まちの滅び方をデザインする。

遺跡化

老朽化が進んだ空き家は再利用が困難である。

なおかつ、過疎地ではその場所自体の価値も低く、再生可能性は限りなく低い。コンパクトシティ化を促進する地域もある。

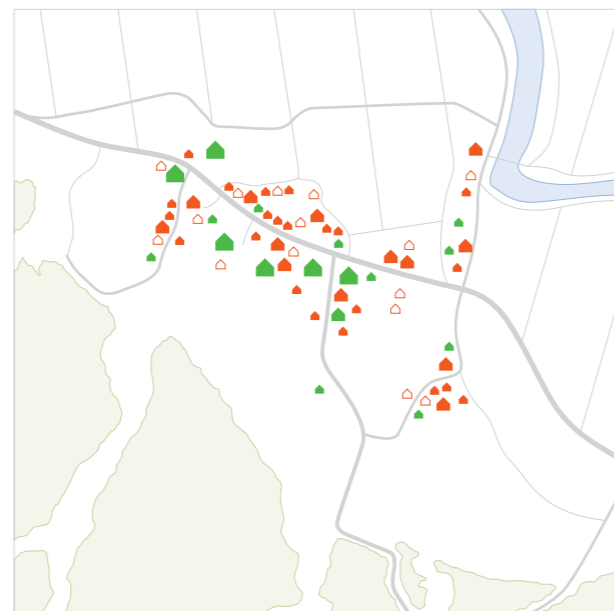
思い出があって壊したくない、というかつての子供もいるだろう。

朽ちるしかないように思える、そんな住宅を「緑のすみか」へとリノベーションを図る。人ではなく、緑が住むところに変換する。

住宅は躯体を残して解体され、家であった所に緑が植えられる。

古びた柱は場所の記憶として辛うじて立つ。子供の頃この家で暮らしたなあ、というふうに見える程度には原型をとどめて。

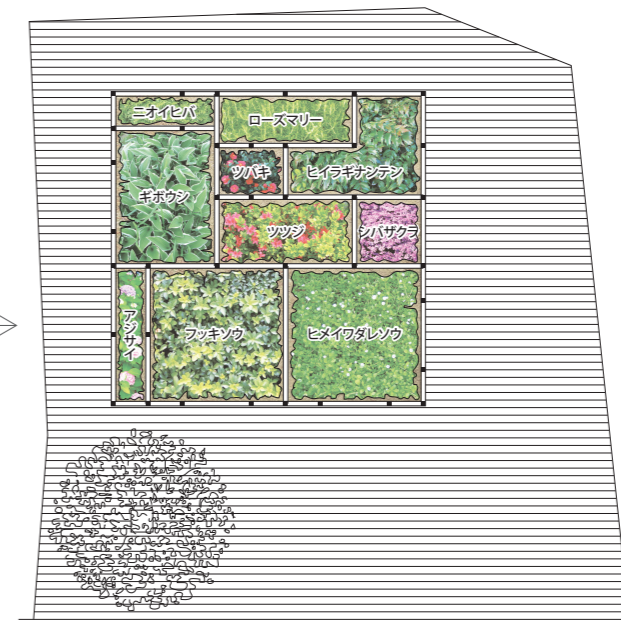
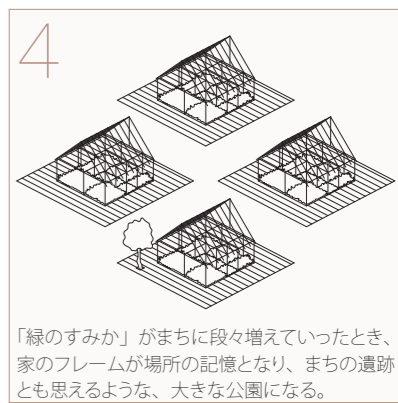
そうやって最終的には、むかしまちだった場所が、大きな公園となり、そしてまた、美しい遺跡としてそこに存在する。



▲ 3人以上の世帯 ▲ 2人の世帯 ▲ 1人の世帯
▲ 高齢者2人の世帯 ▲ 高齢者1人の世帯 △ 空き家

モデルエリア設定

- ・過疎化が進む集落の空き家を対象とする。
- ・高齢化と若い人の人口移動が顕著で空き家が年々増加。
- ・主立った産業も無く、転入の見込みも無い。
- ・市はコンパクトシティ化を推進している。
- ・建物・土地の寄付とともに市がそれを管理または除去し再利用する「空き家等の適正管理に関する条例」をベースとする。



老朽化した外壁・屋根・間仕切りを取り払うことで、大雪等による倒壊の危険が減る。また、明るく見通しが良いので、犯罪に対する近隣の不安を解消できる。

庭および家の周囲はデッキ敷きとすることで、公共性を高めた。雑草の過剰な繁茂防止にも有効である。

企画・管理・運営は、市が NPO 等の団体に委託することを想定。